

茶(煎茶、玉露)の 新たな防除体系の確立・導入



農研機構 野菜茶業研究所(金谷)

茶業研究領域 上席研究員

佐藤安志

日本再興戦略（平成25年6月14日閣議決定）では「日本の農林水産物・食品の輸出促進等による需要の拡大を図る。2020年に農林水産物・食品の輸出額を、現状の約4千5百億円から1兆円とすることを目指す。」とあり、茶は50億円から150億円に拡大する目標が掲げられている。農産物を海外に輸出するためには、輸出相手国の残留農薬基準（MRLs）をクリアすることが求められるが、茶の場合は主な輸出相手国での栽培がないために残留農薬基準が我が国の基準と比べてかなり厳しい。

様々な茶種のうち高品質茶である煎茶と玉露を対象に、茶の需要拡大に繋がることを期待できる輸出想定国の残留基準に対応できる輸出対応型病虫害防除体系を新たに確立し、産地への情報提供及び導入をおこなう。

茶とチャ病害虫防除の特徴



農研機構

- 茶は工芸農作物（加工される）
 - 👉 植物検疫は問題にならない（加工品）
 - 👉 農薬残留値は高め（乾燥させるため）
- 様々な茶種・茶期（収穫期）期がある
 - 👉 栽培体系や防除体系が異なる
- 同一種が年に何回も発生
 - 👉 年間で複数回の防除が必要 多様な薬剤が必要
- 多種多様な病害虫が発生
 - 👉 種類によって生息部位や投下薬液量が異なる
 - 👉 それぞれの特性を掴んだ効果的防除が重要
- チャは永年性作物
 - 👉 前年度散布薬剤の影響についても要検討



対象とする茶種



農研機構

煎茶(主として一番茶)

- 茶種の中で最も生産量が多い
- 一番茶は年の3～5回の摘採茶葉の中で最も品質が良いが、近年は国内余剰が比較的多い
- 一番茶は摘採前の薬剤散布量が最も少なく、残留薬剤種および量が少ない
→ 輸出想定国のMRLs対応が十分に可能？



玉露(一番茶のみ)

- 高品質茶の代表
- 産地(福岡県、京都府)では、既に輸出に向けた検討を実施
- 一番茶期に摘採前の約1ヶ月間を被覆栽培(遮光栽培)
→ 薬剤の光分解を抑制するため、煎茶とは異なった防除体系が必要？



輸出国別対策が必要



農研機構

「輸出茶」の残留農薬調査事例（2013年度調査）

茶種	残留検出 薬剤総数	MRL超過薬剤数	
		対EU基準	対台湾基準
玉露A	4	0	3
玉露B	7	3	0
煎茶A	5	3	0
煎茶B	4	2	0
煎茶C	15	10	1

- MRLsは各国が設定  同一茶でも超過状況は国により異なる
- 同一茶種でも栽培地域によって使用薬剤、使用時期等が違う
 -  検出農薬数及び超過農薬数は異なる

作物名	輸出重点国
茶	(新興市場) <u>EU</u> 、ロシア (安定市場) <u>米国</u> 、 <u>台湾</u> 、香港、 シンガポール



我が国から茶を輸出するには、
輸出相手国ごとの残留農薬基準に対応した
防除体系の構築が必要

【ミッション】

 「短期間で対応せよ！」

-  極力**現行の防除体系**を維持
-  導入する個別防除技術に**優先順位**

1. 日本と各国のMRLsの比較

☞ 日本と同様に使える農薬の特定

2. 茶園で使われる農薬の残留調査

1) 前年使用薬剤の翌年一番茶への残留リスク評価

☞ 残留リスクが低い農薬の特定

2) 一番茶期使用薬剤の残留調査

☞ 対象病害虫ごとに使用可能薬剤をピックアップ

農薬の特徴や使用場面を想定し、
候補薬剤を選定(代替農薬、代替防除法)

3. 各国別の年間の防除体系(案)を策定

4. インポートトレランス農薬候補を選定

登録農薬とMRLsの比較



農研機構

ハマキガ類(チャノコカクモンハマキ、チャハマキ)対象登録資材

農薬種	成分名	IRAC コード	使用 回数	MRLs			
				日本	米国	EU	台湾
カスケード乳剤	フルフェノクスロン	15	2	15	－	15	15
マッチ乳剤	ルフェヌロン	15	1	10	－	0.02	5
コテツフロアブル	クロルフェナピル	13	2	40	0.01	50	2
サムコルフロアブル10	クロラントラニプロール	28	1	50	50	0.02	2
フェニックスフロアブル	フルベンジアミド	28	1	40	－	0.02	－
スピノエースフロアブル	スピノサド	5	2	2	0.02	0.05	1
ディアナSC	スピネトラム	5	1	3	－	0.1	3
テルスターフロアブル	ビフェントリン	3A	2	30	30	5	2
ファルコンフロアブル	メキシフェノジド	18	2	20	－	0.05	10
アフーム乳剤	エマメクチン安息香酸塩	6	1	0.5	－	0.02	0.05

チャのハマキガ類登録剤からの抜粋(10/47)

- 👉 輸出国のMRLsだけからの絞り込みでは、使用薬剤が限定
- 👉 限られた薬剤では、年間の複数回防除への対応困難

代替農薬の検討(事例)



農研機構

- 炭疽病防除に使用される「**テブコナゾール**」が高頻度で検出(一番茶)
- 前年秋から一番茶摘採までの散布実績はない事例多数
- テブコナゾールのMRLは、米国及びEUのMRL対応は困難
→ それぞれ「**ジフェノコナゾール**」、「**プロピコナゾール**」が有望

EBI剤のMRLs比較

農薬種	成分名	MRLs			
		日本	米国	EU	台湾
オンリーワンフロアブル	テブコナゾール	50	－	0.05	10
インダーフロアブル	フェンブコナゾール	10	－	0.05	5
スコア顆粒水和剤	ジフェノコナゾール	10	5	0.05	5
(チルト乳剤; 未登録)	プロピコナゾール	0.1	－	0.1	0.15

－: 未設定(0.01ppmを適用)

- 対象茶種:煎茶(一番茶)、玉露 サンプルは二番茶以後も
 - 過去1年間の農薬散布履歴が明確な圃場由来の茶葉
 - 試料は野茶研(金谷、枕崎)の他、13府県* 及び2民間企業の協力を得て集約
 - * 埼玉、神奈川、静岡、岐阜、愛知、三重、滋賀、京都、香川、高知、福岡、熊本、鹿児島
- オールジャパン体制を構築中
- 製茶、荒茶等に加工作、農薬残留程度を調査
 - 500検体目標 一番茶、二番茶は分析終了(323検体)

- **一番茶摘採前**に農薬を散布
 - ☞ 農薬成分の減衰特性を把握
 - ☞ 一番茶摘採前使用可能農薬の選定
- **二番茶以後も慣行防除**（一農薬種は年間1回の散布）
 - ☞ 農薬成分の減衰特性を把握
 - ☞ 二番茶摘採以降使用可能農薬の選定
- **一部被覆栽培**（農薬散布後から摘採時まで茶樹を被覆）
 - ☞ 被覆（遮光）の農薬成分減衰に及ぼす影響を把握
 - ☞ 被覆栽培における使用可能農薬の特定

◎分析は民間分析企業に委託

自主検査を実施している日本茶輸出組合と同一条件

➤E社：米国、EUへの輸出想定（461成分を分析）

（そのうち、87が日本で茶に登録のある農薬成分）

➤S社：台湾等、東南アジア圏への輸出想定

（398成分を分析）

（そのうち、80が日本で茶に登録のある農薬成分）

＊ 茶に登録のある農薬成分数は94

一番茶葉の薬剤成分残留調査



農研機構

対象薬剤成分

【殺虫剤】

アセタミプリド
イミダクロプリド
エチプロール
エマメクチン
クロチアニジン
クロラントラニリプロール
クロルフェナピル
ジノテフラン
スピネトラム
スピノサイド
チアクロプリド
チアメキサム
トルフェンピラド

ビフェントリン
ピリフルキナゾン
ピリプロキシフェン
ピリミホスメチル
ブプロフェジン
フルフェノクスロン
フルベンジアミド
フロニカミド
メタミドフォス
メチダチオン
メトキシフェノジド
ルフェヌロン
ニテンピラム

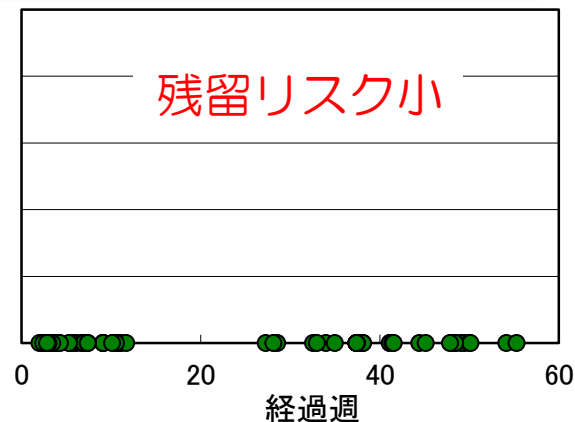
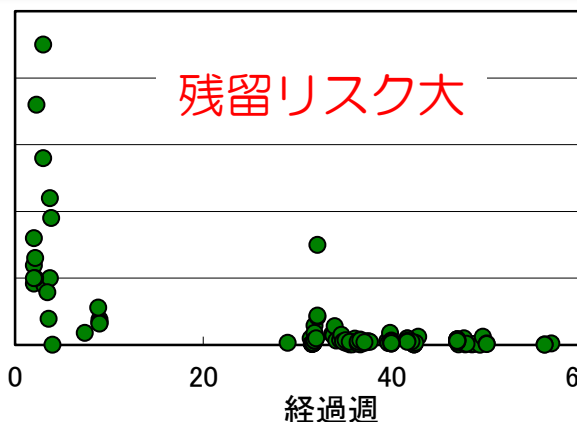
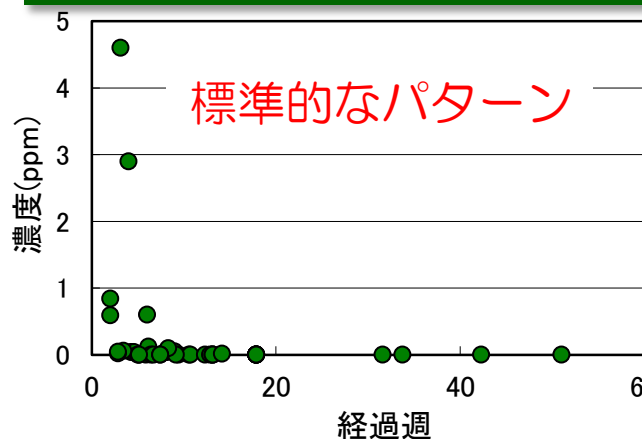
【殺ダニ剤】

エトキサゾール
シフルメトフェン
スピロメシフェン
テフエンピラド
ビフェナゼート
ピリダベン
フェンピロキシメート
ミルベメクチン
プロパルギット

【殺菌剤】

アゾキシストロビン
トリフロキシストロビン
テブコナゾール
フェンブコナゾール
ジフェノコナゾール
ミクロブタニル
クロロタロニル
フルアジナム
カルベンダジム

薬剤成分の減衰パターン

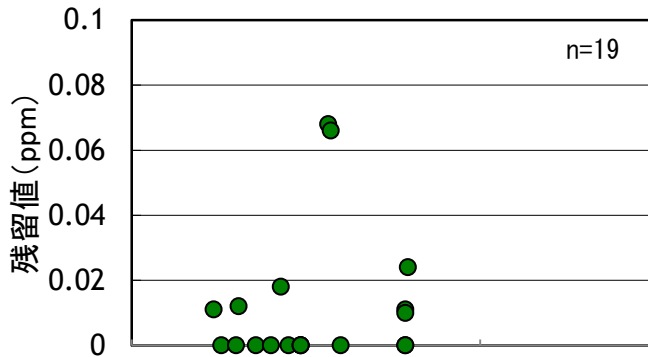


長期残留リスクが高い薬剤成分

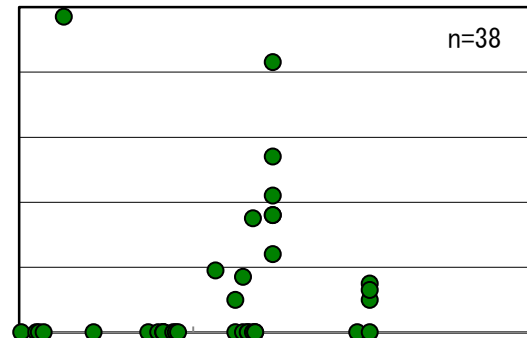


農研機構

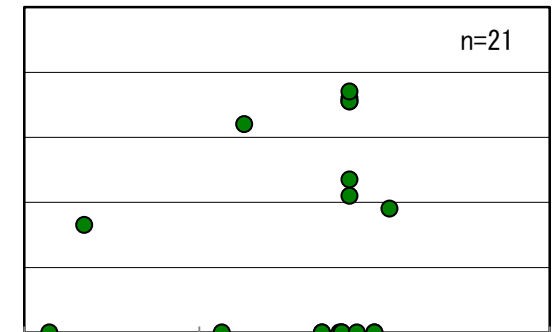
I 剤 (殺虫剤)



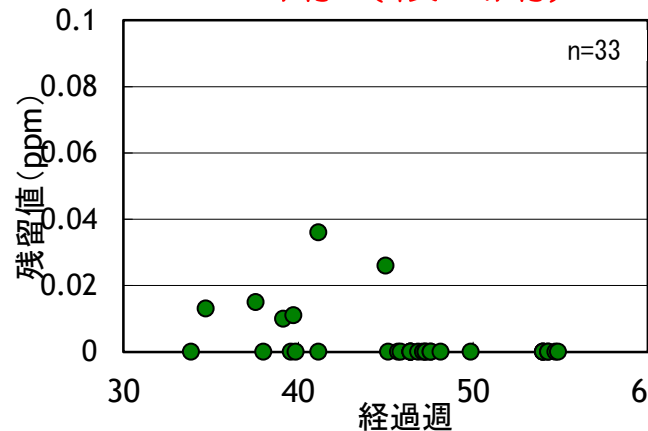
F 剤 (殺虫剤)



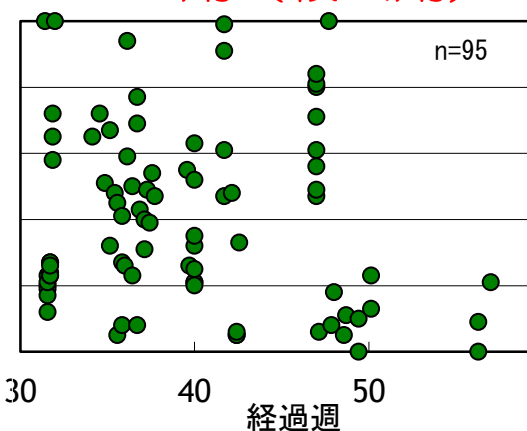
CT 剤 (殺虫剤)



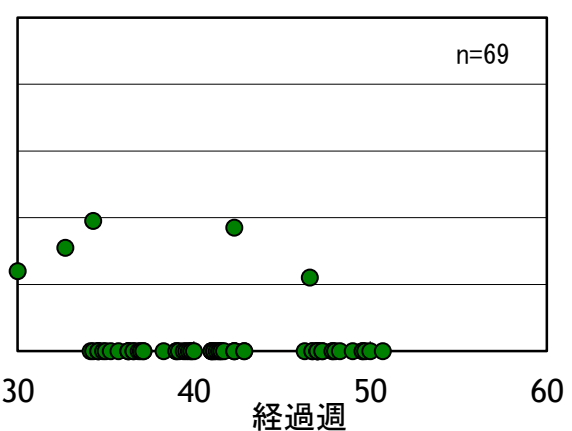
CL 剤 (殺虫剤)



CF 剤 (殺虫剤)



T 剤 (殺菌剤)

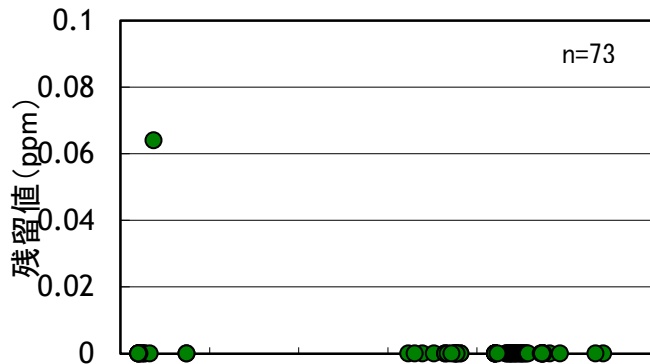


長期残留リスクが低い薬剤成分

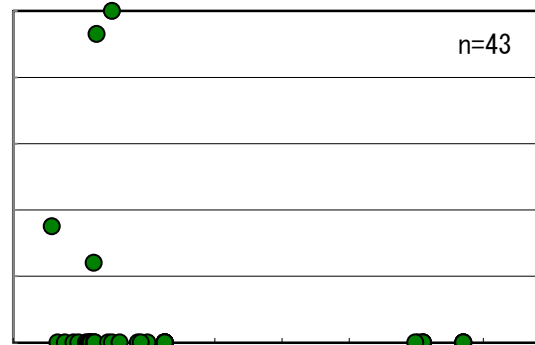


農研機構

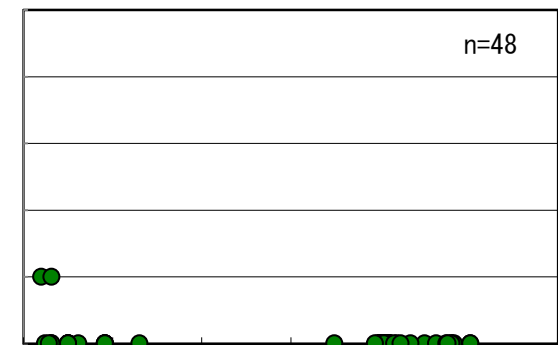
E 剤（殺虫剤）



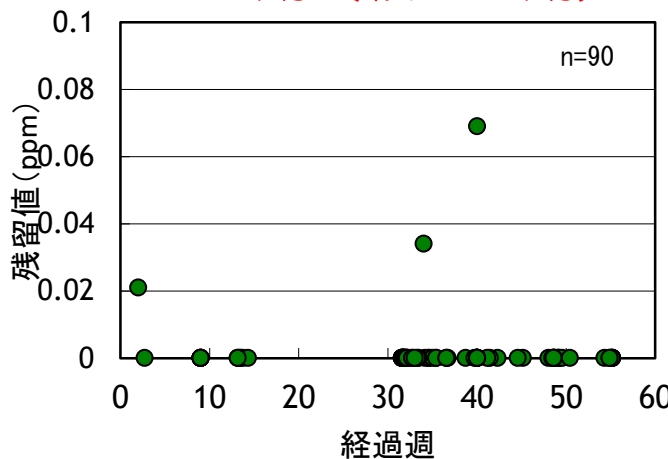
P 剤（殺虫剤）



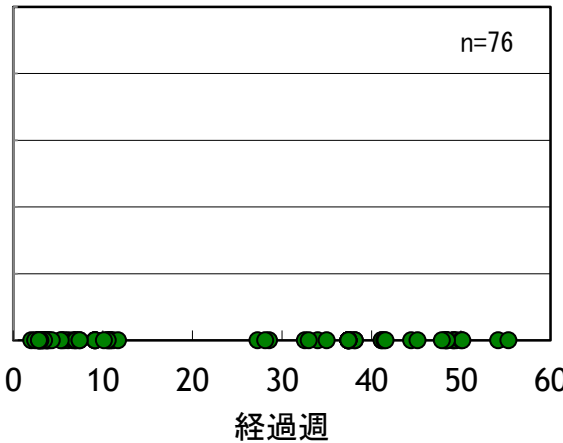
MD 剤（殺虫剤）



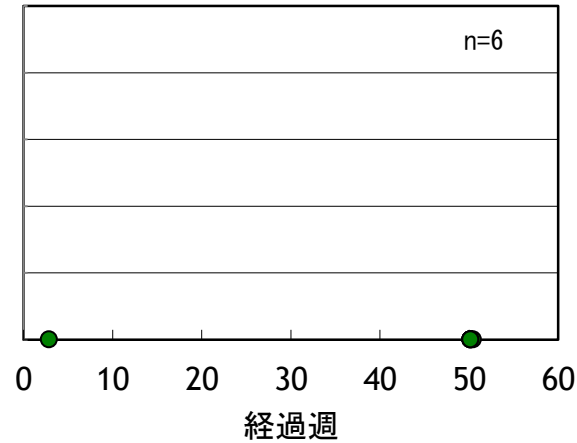
C Y 剤（殺ダニ剤）



MM 剤（殺ダニ剤）



T F 剤（殺菌剤）

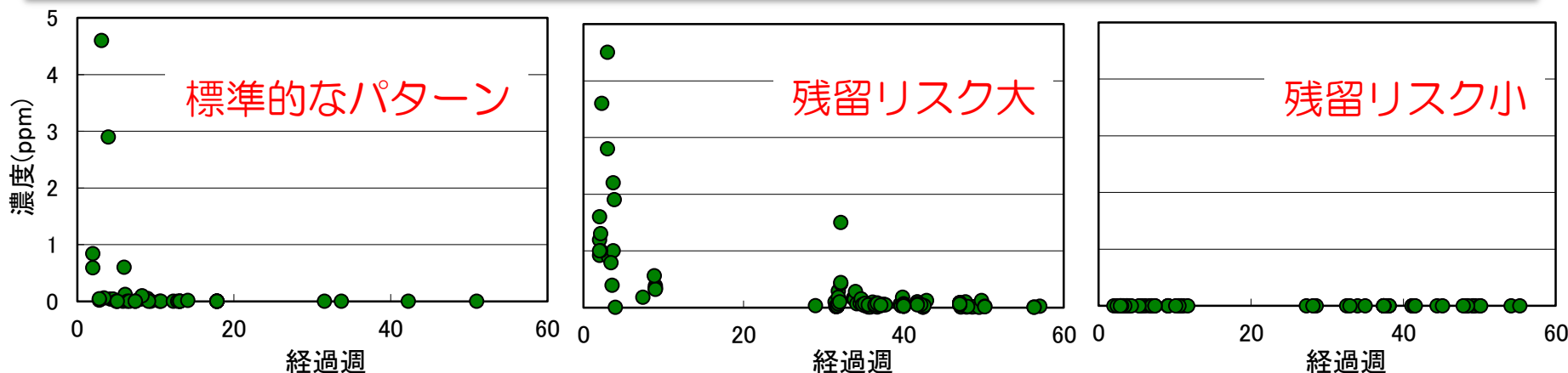


一番茶葉の薬剤成分残留調査



農研機構

薬剤成分の減衰パターン



茶葉で検出される薬剤成分の減衰特性

- 多くの薬剤の残留濃度は、散布3週間後までには日本のMRL以下に
- 多くの薬剤の残留濃度は、散布6カ月後には概ね0.05ppm以下に
- 標準的な減衰パターンは3つに類型化
 1. 標準型: 散布直後は残留値高い、6カ月後にはほぼ0.02ppm以下に
 2. 高リスク型: 散布6カ月後でも残留値が0.02ppm以上
 3. 低リスク型: 散布直後から残留値低い、6カ月後には殆ど不検出

登録農薬とMRLsの比較



農研機構

ハマキガ類(チャノコカクモンハマキ、チャハマキ)対象登録資材

農薬種	成分名	IRAC コード	使用 回数	MRLs			
				日本	米国	EU	台湾
カスケード乳剤	フルフェノクスロン	15	2	15	－	15	15
マッチ乳剤	ルフェヌロン	15	1	10	－	0.02	5
コテツフロアブル	クロルフェナピル	13	2	40	0.01	50	2
サムコルフロアブル10	クロラントラニプロール	28	1	50	50	0.02	2
フェニックスフロアブル	フルベンジアミド	28	1	40	－	0.02	－
スピノエースフロアブル	スピノサド	5	2	2	0.02	0.05	1
ディアナSC	スピネトラム	5	1	3	－	0.1	3
テルスターフロアブル	ビフェントリン	3A	2	30	30	5	2
ファルコンフロアブル	メキシフェノジド	18	2	20	－	0.05	10
アフーム乳剤	エマメクチン安息香酸塩	6	1	0.5	－	0.02	0.05

チャのハマキガ類登録剤からの抜粋(10/47)

- 👉 輸出国のMRLsだけからの絞り込みでは、使用薬剤が限定
- 👉 限られた薬剤では、年間の複数回防除への対応困難

茶の使用剤の中長期的残留評価



農研機構

●一番茶を想定した前年使用剤の残留リスク評価（中間評価・抜粋）

農薬名	成分名	米国				EU				台湾			
		MRLs	47週	36週	28週	MRLs	47週	36週	28週	MRLs	47週	36週	28週
			11 ヶ月前	8 ヶ月前	6 ヶ月前		11 ヶ月前	8 ヶ月前	6 ヶ月前		11 ヶ月前	8 ヶ月前	6 ヶ月前
アクテリック	ピリミホスメチル	—				0.05				0.05			
コテツ	クロルフェナピル	0.01				50				2			
サムコル	クロラントラニリフロール	50				0.02				2			
アフーム	エマメクチン	—				0.02				0.05			
アプロード	ブプロフェジン	20				0.05				1			
ウララ	フロニカミド	—				0.05				5			
キラップ	エチプロール	30				—				—			
スタークル	ジノテフラン	50				0.01				10			
タニケッター	スピロメシフェン	40				50				—			
テルスター	ピフェントリン	30				5				2			
バリアート	チアクロプロリト	—				10				—			
バロック	エトキサゾール	15				15				1			
フェニックス	フルベンジジアミド	—				0.02				—			
プルート	ピリプロキシフェン	0.02				0.05				5			
マイトコーネ	ピフェナゼート	—				0.1				—			
ミルベノック	ミルベメクチン	—				0.1				2			

■：使用可能、■：注意必要、■：使用困難、□：未判定

抜粋データ（16/39・・・殺虫剤33＋殺菌剤6）

👉 多くの剤で、翌年の一番茶の残留リスクは大きくない

👉 残留リスクは相手国によって異なる

◎ 当該茶期に散布した薬剤の中には、残留値が高い薬剤も

当該茶期の残留値が高かった農薬種

農薬種	残留値 (ppm)	
	枕崎	金谷
CT剤	1.59	1.58
TC剤	4.71/1.76	4.14
TF剤	4.11	4.54

👉 剤によって成分投下量が違うことにも注意
(製品の有効成分含量、希釈倍率、薬剤散布量等)

被覆栽培が農薬残留に及ぼす影響



農研機構

成分名	被覆区/ 露地区
アゾキシストロビン	1.4
エチプロール	0.8-2.0
エトキサゾール	1.1, 1.4
エマメクチン	—
クロチアニジン	2.1
クロラントラニリプロール	1.1
クロルフェナピル	1.3, 2.0
ジノテフラン	1.2, 7.1
スピロメシフェン	1.9
チアクロプリド	0.8-2.8
チアメトキサム	0.9
テブコナゾール	1.0
テブフェンピラド	3.3

成分名	被覆区/ 露地区
トルフェンピラド	1.3-5.8
ビフェナゼート	29.9,*
ビフェントリン	0.9, 2.6
ビリダベン	2.1
ピリフルキナゾン	—
ピリプロキシフェン	—,*
フルフェノクスロン	1.3
フルベンジアミド	0.9
フロニカミド	0.3, 0.8
ミルベメクチン	—
メチダチオン	—,*
テブフェンピラド	3.3

*: 露地区で不検出、被覆区で検出, —: 被覆区、露地区とも不検出

■ ≥ 1.5 , ■ ≥ 1.2 , ■ < 1.2

被覆栽培時のリスク評価



農研機構

被覆栽培により残留基準値超過のリスクが高い薬剤

農薬種	残留値 (ppm)		MRLs (ppm)		
	露地区	被覆区	米国	EU	台湾
GT剤	3.21 2.1	4.01 14.9	50	0.01	10
TP剤	0.052	0.17	—	0.1	2
PX剤	ND ND ND ND	0.024 ND ND ND	0.02	0.05	5

ND: 不検出, —: 未設定

■ いずれも基準値を超過, ■ 被覆区のみ超過, ■ いずれも基準値以下

👉 高リスク農薬の減衰特性については詳細を調査中

一番茶期に防除が必要となる害虫



農研機構



カンザワハダニ



コミカンアブラムシ



ツマグロアオカスミカメ*

◆3種ないし2種の「同時防除」を考慮

◆年間防除体系を考慮した薬剤選択

【カンザワハダニ】

☛ 同種その他時期防除

【コミカンアブラムシ・ツマグロアオカスミカメ】

☛ 新芽加害性害虫の防除剤との調整

* 地域によって被害を及ぼす茶期が異なることが知られる

一番茶期使用薬剤の評価と選定



農研機構

●国別・対象病害虫別に登録薬剤を評価(例: 米国・コミカンアブラムシ)

残留評価 (中間評価)	一番茶摘採2週間前散布		* 収穫前2週間以内に使用する可能性もあり				
	対象害虫: コミカンアブラムシ		IRAC コード	収穫前 日数	使用回 数	MRL	
米国	農薬名	成分名				日本	米国
	アクタラ	チアメキサム	4A	7	1	20	20
	アクテリック	ピリミホスメチル	1B	7	1	10	—
	ウララ	フロニカミド	9C	7	1	40	—
	キラップJ	エチプロール、シラフルオフェン	2B	7	1	10	30
	スタークル	ジノテフラン	4A	7	2	25	50
	スプラサイト	メチダチオン	1B	14	1	1	—
	ダントツ	クロチアニジン	4A	7	1	50	70
	バリアート	チアクロプリド	4A	7	1	30	—
	モスピラン	アセタミプリド	4A	14	1	30	50

■ : 使用可能、

■ : 使用困難

【コミカンアブラムシ用使用候補剤(米国)】

	スタークル	ジノテフラン	4A	7	2	25	50
	ダントツ	クロチアニジン	4A	7	1	50	70
	アクタラ	チアメキサム	4A	7	1	20	20

【インポートトレランス候補(米国)】

	アクテリック	ピリミホスメチル	1B	7	1	10	—
	ウララ	フロニカミド	9C	7	1	40	—

代替防除技術の検討(生物的防除、物理的防除等)

- 年間防除回数が多いハマキガ類に対しては、交信攪乱剤や顆粒病ウィルス(GV)剤等を利用
- 一番茶前に防除が必要なクワシロカイガラムシなどは、土着天敵等の有効利用や散水防除を検討
- 一番茶前(冬期)の防除が重要な侵入害虫チャトゲコナジラミに対しては、有望天敵シルベストリコバチを利活用



顆粒病ウィルス製剤と罹病虫



交信攪乱剤“ハマキコンーN”



散水防除法(孵化抑制)



クワシロカイガラムシの土着天敵類



侵入害虫チャトゲコナジラミの被害



有望天敵シルベストリコバチ

年間防除体系の構築例(静岡・米国向け煎茶)



農研機構

防除時期	月・旬	対象病虫害	使用薬剤・防除法
2月中旬	2・中	クワシロカイガラムシ	プルートMC
2月下旬	2・下	赤焼病 チャトゲコナジラミ	コサイド3000 マシン油乳剤
3月中旬	3・中	カンザワハダニ	バロック
一番茶開葉期	4・中	ユシアンアブラムシ・ツマグロアオカミカメ	スタークル/アクタラ
一番茶摘採後	5・中	ハマキガ類	アフーム/サムコル
二番茶萌芽期	5・下	カンザワハダニ クワシロカイガラムシ・チャトゲコナジラミ	ミルベノック/アプロードエース ー(天敵利用)/アプロードエース
二番茶開葉期	6・上	新芽加害性害虫 炭疽病	コルト/ウララ/ガンバ オンリーワン/銅剤
二番茶生育期	6・中	ナガチャコガネ	フォース
二番茶摘採後	6・下	輪斑病 ハマキガ類 チャノキイロアザミウマ	フリント/銅剤 ハマキコンN(交信攪乱剤) キラップ
二番茶萌芽期	7・上	ハマキガ類	ー(交信攪乱)/ハマキ天敵
三番茶開葉期	7・中	新芽加害性害虫・チャトゲコナジラミ 炭疽病・新梢枯死症	ハチハチ フロンサイド/ダコニール
三番茶生育期	7・下	チャノミドリヒメコバヤ クワシロカイガラムシ	アクタラ ー/散水防除法(孵化抑制)
三番茶摘採後	8・上	輪斑病	アミスター/ダコニール
秋芽生育期	8・中	ハマキガ類 ヨモギエダシヤク 炭疽病	ー(交信攪乱) マッチ/BT剤 インダー/銅剤
秋芽生育期	8・下	新芽加害性害虫・マダラカサハラハムシ	ダントツ/モスピラン
秋芽生育期	9・中	カンザワハダニ・チャトゲコナジラミ	ダニゲッター
秋芽生育期	9・下	クワシロカイガラムシ	ー/アプロードエース
秋整枝後	10・中	ハマキガ類	ー(交信攪乱)
	10・下	赤焼病	カスミンボルドー

使用薬剤候補の絞り込み

【カンザワハダニ】(米国向け)

- MRLsの比較から
バロック、ダニゲッター、オマイト、ダニトロ
ン、ハチハチ、テルスター
- 残留リスク評価から
ミルベノック(早期減衰)

【ハマキガ類】(米国向け)

- MRLsの比較から
サムコル、テルスター
- 化学農薬代替資材等
ハマキコンN(交信攪乱剤)、ハマキ
天敵(GV剤)、BT剤
- 残留リスク評価から*
カスケード(6)、アフーム(8)、マッチ
(8)、ディアナ(11)、ファルコン(11)

* ()内は残留リスクがなくなるまでの月数

●防除暦の検証事例(H25福岡・山間地・伝統本玉露園)

防除時期	月・旬	対象病害虫	防除暦事例 山間地玉露	MRLs		中長期残留リスク(中間評価)			備考
				日本	EU	11ヶ月	8ヶ月	6ヶ月	
2月中旬	2・中	クワシロカイガラムシ	—						
2月下旬	2・下	赤焼病 チャトゲコナジラミ	— —						
3月中旬	3・下	カンザワハダニ・サビダニ類	バロック	15	15				
4月上旬	4・上	コシカンアブラムシ・チャノホソガ	バリアード	30	10				被覆リスク中
5月下旬	5・下	クワシロカイガラムシ・チャトゲコナジラミ	アプロードA	30 40	0.05 0.1				
6月下旬	6・下	ハマキガ類(成虫)	—						
二番茶 伸育初期	7・上	ダニ類・新芽加害性害虫	コテツ	40	50				
		ハマキガ類	マツチ	10	0.02				
		炭疽病・もち病	インダー	10	0.05				
三番茶 伸育初期	7・下	新芽加害性害虫・チャトゲコナジラミ	コルト	20	—				残留リスク?
	8・上	ハマキガ類・ヨモギエダシヤク	サムコル	50	0.02				残留リスク
		輪斑病・炭疽病・新梢枯死症	ダコニール	10	0.1				
三番茶 伸育中期	8・中	ダニ類	スターマイト	60	—				残留リスク?
		ハマキガ類・ヨモギエダシヤク	カスケード	15	15				
		炭疽病・もち病・新梢枯死症	オンリーワン	50	0.05				残留リスク?
秋芽 伸育中期	9・上	チャトゲコナジラミ・チャノホソガ・サビダニ類・新芽加害性害虫	ハチハチ	20	—				
		ハマキガ類・ヨモギエダシヤク	ファルコン	20	0.05				残留リスク?
9月下旬	9・下	ハマキガ類類・ヨモギエダシヤク・チャノキイロアザミウマ	ディアナSC	3	0.1				残留リスク?
10月上中旬	10・上中	チャトゲコナジラミ・カンザワハダニ	トモノールS						

インポートトレランス候補農薬の例 1



農研機構

●一番茶(煎茶・玉露)の安定輸出のために必要となる農薬

【アメリカ向けインポートトレランス順位】

優先順位	農薬名	成分名	IRAC コード	収穫前 日数	使用回 数	対象害虫
1	アクテリック	ピリミホスメチル	1B	7	1	コミカンアブラムシ、ツマグロアオカスミカメ、カンザワハダニ
2*	コルト	ピリフルキナゾン	UN	7	2	コミカンアブラムシ(国内適用拡大希望)、ツマグロアオカスミカメ
3	ウララ	フロニカミド	9C	7	1	コミカンアブラムシ、ツマグロアオカスミカメ

*EU、台湾への対応も考慮し、コミカンアブラムシへの適用拡大を図ることを前提に順位を上げた。

【EU向けインポートトレランス順位】

優先順位	農薬名	成分名	IRAC コード	収穫前 日数	使用回 数	対象害虫
1*	コルト	ピリフルキナゾン	UN	7	2	コミカンアブラムシ(国内適用拡大希望)、ツマグロアオカスミカメ
2*	キラップ	エチプロール	2B	7	1	コミカンアブラムシ(国内適用拡大希望)、ツマグロアオカスミカメ
3	ダニサラバ	シフルメフェン	25	7	2	カンザワハダニ

*国内適用拡大(コミカンアブラムシ)が必要。

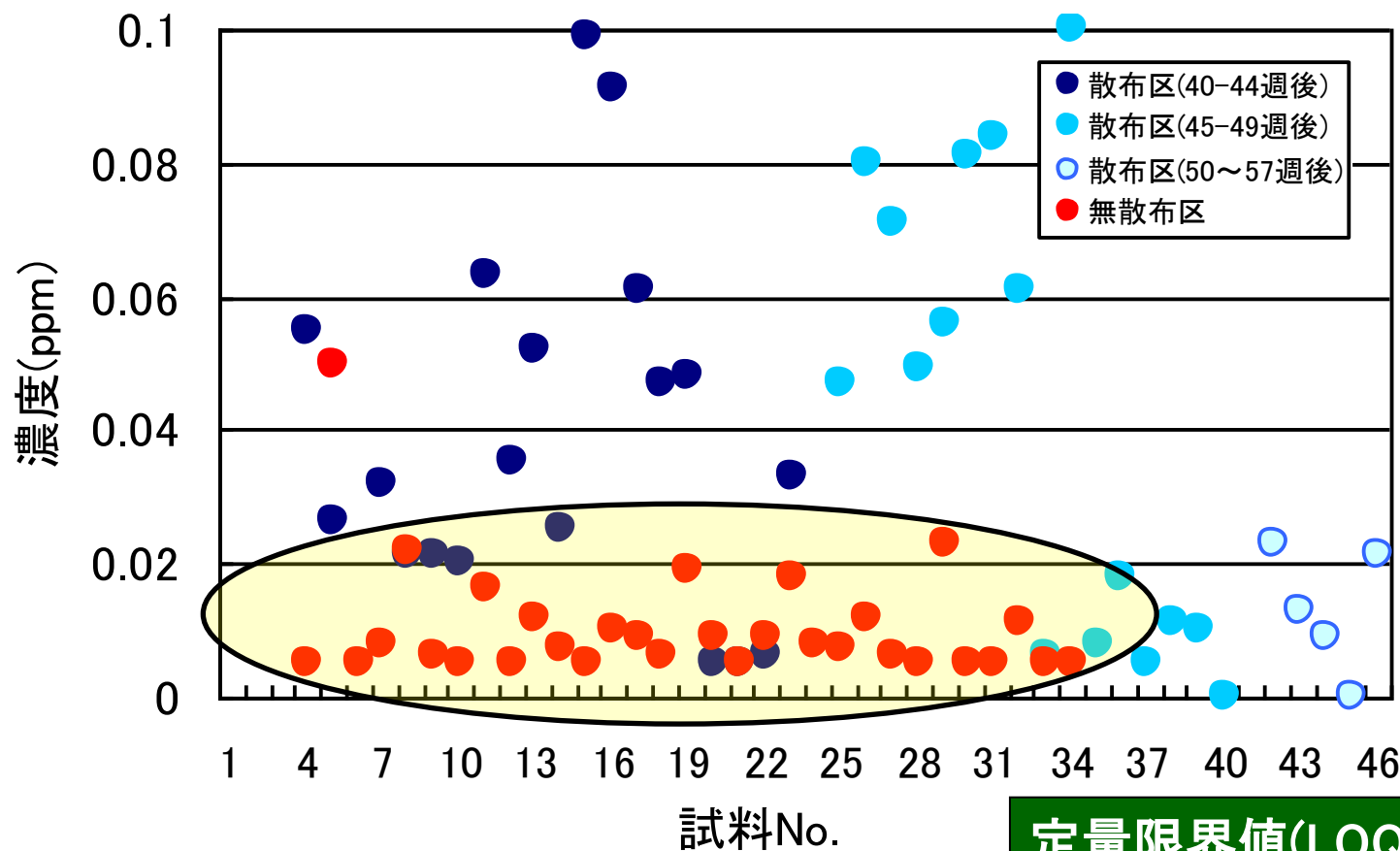
【台湾向けインポートトレランス順位】

優先順位	農薬名	成分名	IRAC コード	収穫前 日数	使用回 数	対象害虫
1*	コルト	ピリフルキナゾン	UN	7	2	コミカンアブラムシ(国内適用拡大希望)、ツマグロアオカスミカメ
2	ダニゲッター	スピロメシフェン	23	7	1	カンザワハダニ
3*	キラップ	エチプロール	2B	7	1	コミカンアブラムシ(国内適用拡大希望)、ツマグロアオカスミカメ

*国内適用拡大(コミカンアブラムシ)が必要。

- 相手国が基準値を設定していない農薬を対象とした
- 一番茶以外の茶の輸出を考慮すると順位が異なる(更なる調査・検討が必要)

CF剤の検出濃度



低濃度ながら無散布圃場でも高頻度で検出 ➡ インポートトレランス要？

- 農薬を巡る最新の情報や海外動向に関する情報の入手法とその利活用のための枠組み作り
- IPM体系推進の中での取り組みの強化（代替防除法の開発と体系化、病害虫の薬剤抵抗性管理等）
- 生産者が望む輸出国、輸出想定国が望む茶種の把握とその対応策の開発（他の茶種や二番茶以後等）
- ジャパンブランドの確立と利用法の検討
 - 👉 行政支援の継続と強化が必要
 - 👉 オールジャパン体制の構築と利用法の検討
 - 👉 地域間競争も温存 茶業の活性化を！